昭和十二年七月五日印刷
昭和十二年七月十日發行

和泉式部日記詳解

定價金貳圓貳拾錢

著者　小室由三
　　田中榮三郎

發行者　東京市神田區神保町三丁目一三
　　奥村銀松

印刷者　東京市四谷區本村町四番地
　　鈴木芳太郎

發行所　東京市神田區神保町三丁目
　　振替東京三一六五七番
　　白帝社

東京・玄黽社印刷・四谷

例　言

本書は、和泉式部日記を初めて讀まうとする人の爲に書いたのである。

本文を便宜上八十六段に區分して、これに通解と語解とを施した。本文の區分は全く著者の便宜に出でたもので、別に他意はない。

本書の本文は群書類從本を底本とし、應永本（龍谷大學彰寫本）、宮內省圖書寮本（日本古典全集所收）、寛文版本、扶桑拾葉集本を以て校定し、三條西家本（雜誌「文學」所載）其他諸本は參考するに留め、その校定參考の箇所は勿論、必要と思はれる文字の異同は煩を厭はず一々「語解」の欄に記入した。

「通解」はなるべく本文の語句に忠實に、「語解」は努めて詳密を期したつもりであるが、何分古來難解を以て稱せられる上に、現存諸本では解決のつきかねる誤脫も見受けられる。淺學菲才の者の之が解を企てる事はおほけなきわざと言はなければならぬ。しかし幸に相當箇所の舊註を補正する事を得たのは、私かに著者の懌びとする所である。識者の垂教を賜はりたい。

本書の挿畫は寛文版本から採つた。

附錄の「異本和泉式部集」は、傳後土御門院宸翰本として昭和八年六月趣味講座出版部より複製されたもの、今回有川武彥氏、小川壽一氏の御厚意に依つて活字化するを得たのである。玆に謹んで有川氏、小川氏並びに架藏者谷村一太郎氏に深謝の意を表する。

本書の世に出るについては小室由三先生に一方ならぬ御配慮を、小著の成るについては長友宇佐美喜三八君其他知友に種々御援助を賜はつてゐる。茲に記して厚く感謝の意を表する次第である。尚、幾多先進の高著から貴重な啓發を受けた事をも併せて深謝しなければならない。

昭和十二年六月一日

中京の寓にて

著者

解題

和泉式部日記、或は和泉式部物語と呼ばれる此の作品は、王朝期藤氏極盛時代の女流歌人和泉式部の述作に成るといふのが殆んど古來の定說になつてゐるが、尙幾分の疑問がある。

作者和泉式部の傳記は、平安朝の他の女流作家のそれと同じく從來極めて不明であつたが、近年岡田希雄氏等の精到な考證によつて、此の傳記研究もまづ現存資料に據る最高點に達したかの觀がある。

式部の生歿は不明である。與謝野晶子氏は「諸種の事情を湊合して、圓融天皇の天延二年に生れたと推定」して居られる。（日本古典全集、和泉式部全集解題）式部の父は越前守大江雅致、母は冷泉院皇后昌子內親王に仕へた女房、平保衡の女であるといはれる。そして幼時を、母の仕へてゐる昌子の宮で、當時の他の受領階級の女と一般、物質の不自由を知らずに過した式部は、長じて和泉守橘道貞と結婚した。和泉式部といふ稱呼はこのためであらう。道貞と交涉を生じた時期も無論不明である。一條天皇の長德二年頃であらうとの與謝野氏の推論では、式部二十三歲頃の事として居られるらしい。

かくて道貞との間に小式部內侍が出來たが、道貞一人を夫として守るには、式部はあまりに放縱に過ぎた。從つてその夫婦仲も健全なものではなく、時には夫の任地へ下つた事もあるが、多くは華かな都の生活を離れがたく、夫婦別居の狀態をつゞけたので、美貌と歌才、加ふるに奔放な情熱の女である式部の周圍には、常に男出入が絕えなかつたやうである。

そのうちに容色無雙の聞えある彈正宮爲尊親王との戀愛が成立した。當時この戀愛事件が京中のセンセーションを起した事は、大鏡や榮華物語の記事によつて想像される。然るに彈正宮は長保四年六月に突如薨去せられた。かうして翌五年

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

四月、故宮の御同母弟たる帥宮敦道親王との交渉が始まるのである。藝術的天分豊かな純情の貴公子と才藻情熱並びなき年長女性との戀愛は、周圍の非難障碍を押切つて加速度に進展し、遂に同年十二月、帥宮は躊躇する式部を強ひて御自邸なる南院に迎へ入れられたので、妃の宮は御氣の毒にも南院を去つて小一條の祖母君の許へ歸られた。

此の頃、式部と道貞との關係は全く絶縁したわけである。式部の親友赤染衛門は夫の任地尾張の國府に居ながら、遙かに、

うつろはで暫し信田の森を見よかへりもぞする葛のうら風

の歌を贈つて諫めたが、式部は、

秋風はすごく吹くとも葛の葉のうらみ顏には見えじとぞ思ふ

と答へて、覆水は遂に盆に返るべくもなかつた。

寛弘元年三月下旬、道貞は陸奥守となつて下向した。家集五に、

みちのくにの守にて立つを聞きて

諸共にたゝましものをみちのくの衣の關をよそに聞くかな

とあるのは、式部の僞らない心情であらう。

また式部が帥宮に伴はれて、洛東白川にある藤原公任の山莊を訪ねたのも、此の頃の事であらう。

四月の賀茂の祭には、帥宮は式部と同車して見物され、その行裝の華美に京童の眼を瞠らしめられた。大鏡、兼家傳には、

帥宮の祭のかへさ、和泉式部の君とあひのらせ給ひて御覽ぜしさまも、いと興ありきやな。御車の口の簾を中よりきらせ給ひて、わが御方をば高うあげさせ給ひ、式部の方をばおろして、衣長う出ださせて、紅の袴にあかき色紙の物

忌いと廣きつけて、土とひとしうさげられたりしかば、いかにぞ、物見よりは、それをこそ人見るめりしか。と見えてゐる。この時帥宮は御年二十四歳位、式部は少くとも三十を越えた姥櫻でなければならないが、猶かうした華麗な裝にふさはしい若さを保持してゐたのである。

かうしてこの戀愛は、寛弘四年十月帥宮薨去に至るまで、足掛け五年に亘つて繼續したといはれる。帥宮の薨去は式部に對して致命的打擊を與へ、一時は尼にならうかとさへ考へしめた。和泉式部續集上に見える亡き帥宮を悼む百餘首の聯詠は、一年の喪に服する間、事に觸れて切々たる哀慕傷心の情を抒べたものである。

式部が一條天皇の中宮彰子の御許に宮仕したのは、故帥宮の御喪の終つた翌年、卽ち寛弘六年の晩春頃であらうといはれる。當時中宮の御許には、紫式部、赤染衞門、伊勢大輔等の多くの才媛が集まつて居たのである。かくて道長に重用せられた藤原保昌と結婚する因緣が結ばれ、丹後守となつて赴任する保昌に伴つて、式部も下向した。しかし當時すでに五十の坂を越えてゐた武人肌の保昌が、恐らくまだ三十代であつたらう多情な式部にとつて、恰好な愛慾の對象であつたとは想像せられない。間もなく式部は歸洛したが、彼女を繞る異性の影はやはり絕えなかつたやうである。かく保昌との間も決して幸福なものではないが、其後時々保昌の任地である大和や攝津へも下向したといはれる。そして、保昌との關係は、「少くとも萬壽四年冬まで續いた」と岡田氏は言つて居られる。（岩波講座日本文學、「和泉式部」。）

此の頃、式部最愛の女小式部は頭中將藤原公成の男子を生んで、その產のために他界した。小式部は秀れた歌才と美しい容姿に惠まれ、母と共に中宮彰子に仕へて、當時の貴紳との間に數々の情話を殘し、道長の三男敎通との間にも男子を儲けてゐる。小式部の死は母の式部にとつて、帥宮の薨去以上の痛恨事であつたらう。家集三、四には、母性の眞情より迸る悲痛な哀韻を傳へてゐる。

式部の晩年については全く知る事が出來ない。岡田氏が、「內大臣敎通の公達や、左兵衞督公成の息の祖母として、物

質的に不運な晩年を送つたとは信ぜられない。各地に豊富に存する式部の流離説話は單なる説話である。」と言つて居られるのは傾聽すべきである。然らば何故に式部の流離説話が斯くも豊富に諸國に存在するに至つたか。この民俗學的疑問が我等に殘された問題でなければならぬ。柳田國男氏の「女性と民間傳承」は、この疑問を解決せんとした研究として興味深い著である。

×

和泉式部日記は式部と帥宮との戀愛生活の初期を、歌を中心として物語風に綴つた作品である。長保五年四月十日過ぎ、帥宮の使である小舍人童が式部を訪れるところで始まり、翌寛弘元年正月、宮の北の方が宮邸を去るところで終つてゐる。日記中式部自身を「女」といふ第三人稱で書いてある。一名和泉式部物語とも云はれる所以である。帥宮との戀愛生活を追憶して書き纒めたものであらうが、その述作の時期は不明である。歌を主とした點に於て伊勢物語や伊勢集との關係も注意されるが、此の日記製作の材料として、式部自撰の「手控へ的な歌日記風のものが存したこと」を想定して居られる岡田希雄氏や清水文雄氏の論考、殊に岡田氏が和泉式部續集に見える一聯の日次的な歌群を例證として指摘して居られる如きは注意すべきである。（本書一四六頁「風の前なる」語解參照。）

×

此の日記の文學的價値は勿論傑作として許さるべき程のものではなからうが、平安朝を通じての情熱歌人の戀愛記錄として獨特の味を持つてゐる事は爭へない。殊に歌より散文への推移過程上の作物として、又「物語」と「日記」との中間作品として、その學的位置は、「文學上さまで價値あるものにあらず」と言はれた藤岡博士の言（國文學全史平安朝篇、四〇六頁。）をそのまゝ肯定する事は出來ない。寧ろ潤色誇張した歴史文學や紀行文學等に於ては見る事の出來ない內面的な迫力を感じるといへる。又作者卽式部として考へれば、そこに屢々式部の直接經驗せざる事實——例へば帥宮が自邸に於

て御乳母より諫言を受ける場面の如き――までを描寫してゐる如き、所謂「物語」的要素を多分に有してゐる點に於て、他の、殆ど同時代の日記とはかなり異なつた觀點に立つてゐるばかりでなく、逡巡しつゝもひたむきな情炎の囚となつてゆく主人公の娼婦的傾向は、透徹した觀照に浸る紫式部日記や飄渺とした幻影を描く更級日記に比して、殊に凄慘な苦惱に喘ぐ蜻蛉日記の母婦的傾向とは興味深い對照をなしてゐる。

文學形式としての此の日記の價値は、畢竟贈答の和歌に在るといはれてゐるが、和歌と散文との微妙な接續や、五十嵐博士も指摘されたやうに數人の言葉を一氣に書き並べる手法（本書一九〇頁。）など棄て難いものである。しかし所詮、散文は作者の最も得意の壇場でなかつた。全篇殆ど平凡な贈答で終始してゐる關係上、一面に於ては已むを得ない事でもあるが、この短篇の中に屢々類似の表現を繰返してゐる如きは、決して作者の散文に於ける詞藻の富贍を裏書するものではない。

（近き透垣のもとに人のけはひのすれば、誰にかと思ふ程に、さし出でたるを見れば、故宮にさぶらひし小舍人童なりけり。
（高欄の下の方に人のけはひのすれば、あやしうて見おろしたれば、この童なりけり。
風の音、木の葉の殘りあるまじげに吹き亂る、常よりも物あはれに覺ゆる。
（その夜、時雨常よりも木々の木の葉殘りありげもなく聞ゆるに、目を覺まして、
（書はまだ見え參らせねば、いと恥かしう思へど、
（書などはまだ御覽ぜられねば恥かしけれど、

×

和泉式部日記又は和泉式部物語の傳本（三條西家本と群書類從本を除いて他の諸寫本古版本は、すべて和泉式部物語である。）の重なものを擧げると、寫本では、

一　應永本

が從來、現存最古の寫本とされてゐた。この書は奥書に、

于時應永二十一年孟春日書之權大納言從二位爲尹判

とあり、京都帝大國文學研究室の架藏である。爲尹自筆本を後人が更に轉寫したものである。龍谷大學國文學會刊行の「應永本影寫和泉式部日記」はこの書の複製本である。然るに近年、

二　三條西家本

が池田龜鑑氏によつて紹介され、應永本と對立して別系統を形成するに至つた。池田氏は、「奥書がないから書寫年代は不明であるが、恐らくは室町時代の中期ごろのものと思はれる。」と言はれてゐる。（文學第六號、「異本和泉式記日部」）。現存諸本中最も原形に近い形體を傳へるものであらう。（清水氏の論考に據る。）この本は雜誌「文學」第一卷、第五及び八號に飜刻された。この外には、

三　宮内省圖書寮本

書入も奥書もないが、語句の一致する箇所の多い事から推して應永本と同系統のものと思はれる。

四　大阪府立圖書館本

卷頭に敦道親王と和泉式部との略歷と、次の如き斷り書がある。

此本寫謬おほし以他本令校合畢ぬ今傍にイとせるは扶桑拾葉集の本なり又イとあるは拾葉集の異本也板本とは享保刻の町板本也板イとしるせるは則其板行の異本なりとしるべし右板行の本といふも寫誤或は脫落あり拾葉本にて補ふ但しいまだ全しとせず猶いかにぞやある所有考ふべし今本のまゝに寫しひがめるは其まゝ改むしるしなきをそれとしれかくいふは天たもつとしの十五年正月一日なり

五　久原文庫本

奈良繪本である。

六　彰考館本

扶桑拾葉集本の原本といはれる。

刊本では、

一　寛文版本

上中下三冊繪入で、寛文十年霜月の開板である。應永本の系統といはれる。奥に、

寫本云

此一冊ハ借ニ右中辨兼秀本ヲ一從ニ去ル月十四日一

染レ筆今日終レ功畢

享祿二年五月朔日　　右少將藤言繼草名

二　享保版本（元文版本）

右の寛文版本の再版本である。

三　扶桑拾葉集本

次の群書類從本と同系統で、應永本系統に對して少し異る系統に立つ本である。

四　群書類從本

卷末に、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

右和泉式部日記以扶桑拾葉集校合了

明治以後の活字本では、

五　日本文學全書本

解題に、

今は稿本をもとゝし、本村正辭先生の藏本なる古寫本と、その他二三の異本とを以て校合せり。

六　國文大觀本

七　校註　國文叢書本

八　有朋堂文庫本

木版類從本に據つたのである。

九　新釋　日本文學叢書本

一〇　校註　日本文學大系本

一一　日本古典全集本

類從本を底本とし、圖書寮本を以て校訂してある。

註釋書では古いものに纏まつたものはない。

和泉式部物語標目

帝國圖書館藏の寫本で、たゞ日記中の事項を類別配列したゞけで解釋上には役立たないといふ。

和泉式部日記類標

無窮會神習文庫藏。日記中の語句を五十音順に排列したものであるといふ。

新譯和泉式部日記　　與謝野晶子氏

全譯王朝文學叢書第十一卷

いづれも全文の口譯であるが、前者には和歌の譯はない。

校定　和泉式部日記新釋　　竹野長次氏

日記文評釋（續國文學講座所收）　　宮田和一郎氏

和泉式部日記通釋（雜誌「國語教育」連載中）　　玉井幸助氏

外國語譯では、

Diaries of Court Ladies of Old Japan
translated by
Annie Shepley, Omori and kochi Doi

Erklärung des Tagebuches Idzumi-sikibu
von
Dr. August Peiznaier

見るほどに
心にとまる月なれど
影ははるかになりもゆくかな

和泉式部

一

夢よりもはかなき世の中を歎きつゝ、明し暮すほどに、はかなくて四月十日あまりにもなりぬれば、木の下くらがりもていく。

〔通　解〕

夢よりもはかない世の中の有樣を悲しみつゝ、日を過してゐるうちに、夢のやうに月日は流れて四月十日過ぎにもなつたので、木々の葉も繁つて、木蔭はだん〳〵暗くなつて行く。

〔語　解〕

○夢よりもはかなき世の中。――夢ははかないものであるが、その夢よりも更にはかない人生。作者和泉式部が、彈正尹爲尊親王に死別して、人生のはかなさを痛感してゐるのである。「はかなし」は、頼みにならない、もろい、とりとめがないの意。（古今集一六、哀傷、あひ知れりける人の身まかりにける時によめる、壬生忠岑「ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をもうつゝとは見ず」）○はかなくて。――「これといつてとりとめた事もなく、いつしか」の意。○四月十日あまり。――長保五年四月十餘日。○木の下くらがりもていく。――青葉が繁つて次第に木下闇になつて行くのをいふ。「もて」は動作の進行、繼續を現はす。「いく」は「ゆく」。

二

はしのかたをながむれば、築土の上の草の青やかなるも、ことに人は目とどめぬを、あはれにながむるほどに、近き透垣のもとに、人のけはひのすれば、誰にかと思ふほどに、さし出でたるを見れば、故宮にさぶらひし小舍人童なりけり。

〔通　解〕

庭の方を眺めると、土塀の上に生えてゐる草の青々としてゐるのをも、他人は格別氣にも留めないのであるが、しみ〴〵と見入つてゐると、近くの透垣の所に人の來た樣子がするので、誰だらうかと思つてゐるうちに、出て來たのを見ると、亡くなられた宮樣にお仕へしてゐた小舍人童であつた。

〔語　解〕

○はしのかた。――端の方。「はし」は家の中で外面に近い處をいふ。○築土。――築泥（ツキヒヂ）の音便。箋注倭名類聚抄卷三（居處部第六）に、「築墻。淮南子云、舜作二築墻一。都以加岐、一云豆以比知。」とあり、土を盛上げて造つた墻で、今の芝生土手のやうなものをいふ。家屋雜考に、「もと築塀といふ事なるを、音便にてツイヂ、ツイガキ、ツイガイなどよぶなり。今築地とかくはあたらず。」とある。大鏡列傳、太政大臣伊尹の條に、花山院の風流を書いて、「撫子の種をついぢの上にまかせ給へりければ、思ひかけず、四方に色々に唐錦をひきかけたるやうに咲きたりし云々」とある。後世は屋根のある土塀をもいふ。○ことに。――殊に。格別に。○人は目とゞめぬを。――他人は目もつけないのを。○あはれに。――身にしみて。○透垣。――透垣（スキガキ）の音便。「すいがき」ともいふ。家屋雜考に、「板と板との間を聊づゝすかしたる屏なり。又板と板との間へ、竹を交へて、打ち付けたるもあり。古圖どもを見るに、その造りさま〴〵あり。」とあり、宮殿調度圖解には、「今いふ四つ目垣は、昔の籬にて、透垣の部にあらず。」とある。○もとに。――あたりに。○人のけはひ。――人の來た（又は、居る）樣子。「けはひ」は氣配、氣色、樣子をいふ。「けしき」と「けはひ」について、土井忠正氏は、「『けしき』と『けはひ』とは相通じても用ひられるが、其の間自ら相違がある。『けしき』は自主的表示に言つて特に顏面の表情を示し、『けしきばむ』といふ動詞形もある。……『けはひ』は第三者の印象から言ひ、品格、態度又は印象等と解してよいであらう。美的對象となるのは『けしき』よりも『けはひ』が多い。けはひは又特に音聲にいふ事がある。人の聲は形がなくてその人柄の知られるものであるからであらう。云々」と言つて居られる。（國語國文の研究、第二號、「容姿美を表現せる王朝期物語用語に就いて」）○誰にか。――下に「あらむ」を補ふ。○さし出でたるを。――「さし」は接頭語。「ぬつと出て來た姿を」の意。○故宮。――冷泉院第三皇子爲尊親王。日本紀略、長保四年六月

の條に、「某日、入道彈正尹二品爲尊親王冷泉皇子薨。」とあり、本朝皇胤紹運錄に、權記を引いて、「長保四年六月十三日丑刻許、惟弘來云、彈正宮薨給云々」とある。

第六十三　冷泉院　諱憲平。治二年　母中宮安子。師輔公女

第六十五　花山院　諱師貞。治二年　母贈皇太后懐子。伊尹公女

第六十七　三條院　諱居貞。治五年　母贈后超子。兼家公女

〔紹運錄抄出〕

爲尊親王（二品彈正尹。母同）

敦道親王（三品太宰帥。母同）―永覺

宗子內親王（二品。母同二花山一）

尊子內親王（二品。齋院。後入二圓融院一。母同）

光子內親王（母同二三條一）

○小舍人童。――召使の男童。近衛中將、或は少將の召具す童をいふが、こゝでは一般に貴族の家に召使はれてゐる童をいふ。又、藏人所に使はれる小舍人は別。

三

あはれに物を思ふほどに來たれば、

「などかいと久しう見えざりつる。遠ざかる昔の名殘にはと思ふを。」

などいはすれば、

「その事とさぶらはでは、馴れ〳〵しきやうにやと、つゝましうさぶらふうちに、日頃山寺にまかり

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com